

概 要

第 13 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりと語ろう、宝塚市の未来～

テーマ：公立学校園では日本初！

西谷地区で国際バカロレア（IB）教育を通した

幼稚園から中学校まで一貫した探究型学習の取組へ

日時：令和 8 年 1 月 11 日（日） 午後 2 時～午後 4 時 10 分

場所：西谷中学校 多目的室

参加者：58 名

出席者：

森市長

国際バカロレア機構

アジア太平洋地域開発及び高大連携アソシエイト・マネージャー 黒川礼子さん

教育委員会管理部－高田部長 教育委員会学校教育部学校教育担当－三ヶ尻次長

《説明》

1 国際バカロレア機構の概要

- ・1968 年設立の非営利教育財団（本部：スイス・ジュネーブ）
- ・世界 162 か国・6,000 校以上で導入
- ・幼児期から高校段階までの一貫した教育プログラムを提供
- ・日本国内では約 140 校が認定

2 IB 教育が生まれた背景

- ・国を越えて移動する子どもたちの学びを継続させるため
- ・教育内容や理念を国際的に共通化する目的で開始

3 IB 教育の基本理念

- ・多様な文化の理解と尊重
- ・探究心・知識・思いやりを備えた若者の育成
- ・より平和な世界への貢献
- ・機構は学校を運営せず、理念に賛同する学校を認定

4 学習者像

- ・探究する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念を持つ人
心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスのとれた人、振り返りができる人

5 IB 教育の広がりとは公立導入

- ・日本は IB 認定校数が世界で 7 番目
- ・公立・国立校での導入も進んでいる（日本は約 16%）
- ・兵庫県では一条校での導入は 1 校

6 日本の教育との関係

- ・教育基本法の理念と IB の使命は多くの点で共通
- ・「外国の特別な教育」ではなく、日本の教育と親和性が高い

7 IB のカリキュラム構成

- ・初等教育：教科の枠を超えた学び（トランスディスプリナリー）
- ・中等教育：教科横断的な学び（インターディスプリナリー）
- ・高校段階：専門性を深める学際的な学び

8 学びの具体例

- ・教科内容を通して社会や自然、人の考え方を理解
- ・実体験を重視し、概念的理解を深める授業設計
- ・幼児期から体験を通じて「変化」や「関係性」を学ぶ

9 構成主義的アプローチ

- ・子ども一人ひとりが異なる知識や経験を持つことを前提
- ・知識の習得に加え、分析・統合・応用・行動につなげる学び

10 IB 教育の意義

- ・探究学習や概念理解を重視
- ・学んだことを社会で生かす力の育成
- ・変化の激しい社会に対応できる思考力の形成

《対話》

1 参加者【IB 導入に伴う教員の負担・異動時の継続性について】

- ・IB は教育目的自体は教育基本法と同じとされているが、教え方やカリキュラム設計が大きく異なると感じている。既存教員が IB を導入する際のハードルや課題は何か。
- ・公立校では教員異動があるが、異動がある中でも IB 教育を継続する上での課題や実例があれば知りたい。

➔ 応答

- ・PYP※・MYP※は日本語で導入可能。既存の教科書を活用しつつ、教科横断的な学びを前提としたカリキュラム設計が必要となる。
- ・年間計画の中で、各教科の単元を縦横に関連付けて構成する工夫が求められるが、IB 独自フォーマットに合わせる程度で、過度な負担ではない。
- ・公立校における教員任期・異動の課題は他自治体でも共通であり、任期延長や配置方法の工夫など、自治体判断で対応されている。
- ・IB 認定校の教員は IB 研修の受講が必須であり、異動してきた教員も研修を受けた上で配置されるため、基本的な考え方は共有される。
- ・カリキュラムは学校に蓄積されるものであり、一定の連続性は確保できると考えている。

※PYP（プライマリー・イヤーズ・プログラム）とは、国際バカロレア（IB）が提供する 3 歳から 12 歳までの初等

教育プログラム

※MYP（ミドル・イヤーズ・プログラム）とは、国際バカロレア（IB）が提供する中等教育（11～16歳対象）の学習プログラム

2 参加者【IB（国際バカロレア）の名称の由来と進学、地域展開の見通しについて】

- ・IBは想像力や課題解決力などを重視する点で興味深い。「バカロレア」という名称の由来や意味について知りたい。
- ・宝塚市でIBに取り組んだ場合、高校・大学への接続や、兵庫県・関西圏など地域的な広がりをどのように確保していくのか、現在の取組状況を聞きたい。

➔ 応答

- ・日本国内外でIBを活用した大学進学ルートは既に確立されており、国立大学を含む多くの大学が受入れを行っている。高大接続に関する大学参加型イベントも継続的に実施しており、国内外の大学の参加が拡大している。
- ・DP（高校課程）がなくても、MYP（中学校課程）を評価資料として大学進学が可能なケースもあるなど、進路には複数の選択肢がある。
- ・IB教育はあくまで選択肢の一つであり、日本の教育課程と併存しながら将来につなげていくことが可能である。

3 参加者【学習指導要領との関係及び乳幼児期教育とIBの位置付けについて】

- ・IBは主体的・探究的な学びを重視しているが、学習指導要領に基づく公立学校教育とどのように両立するのか。現行の時間割・教科・授業時数に制約のある中で、公立校にIBを導入する場合、教育内容を大きく変革する必要があるのではないか。
- ・主体的・探究的な学びの土台は乳幼児期（特に0～3歳）に形成されると考えるが、IBではこの時期をどのように位置付けているのか。

➔ 応答

- ・PYP及びMYPは柔軟性の高い枠組み。現行の指導要領に基づく単元計画を生かしながら、IBの視点を重ねて実施することが可能。
- ・PYPは3歳からのプログラムであり、幼児期は遊びを探究に位置付ける教育フレームとなっている。
- ・学習指導要領は全国共通だが、学校や自治体ごとに一定の柔軟性は認められている。
- ・IBは国際的な枠組みであり、方向性や教育観を重視する制度で、日本の指導要領と十分に両立可能である。
- ・IB導入は業務増加ではなく、教育の「やり方」を工夫することによる改善であり、公立校での実践事例を見れば理解できる。

4 参加者【IB導入に伴う監査、評価体制と教員の勤務負担への影響について】

- ・日本の学校は長時間勤務などから「ブラック」と言われるが、その背景には外部からのチェックや改善を促す仕組みの弱さがあると感じている。IB 導入にあたり、IB 機構と学校・教育委員会との間で、どのような認定・評価（監査）ややり取りが行われるのか。
- ・IB 導入前後で、教員の勤務時間や業務負担は実際にどう変化しているのかを知りたい。

➔ 応答

- ・IB では「監査」という言葉は用いないが、認定・評価制度が存在する。認定時には、カリキュラム資料の提出、認定団による学校訪問、教員・保護者・地域・児童生徒へのヒアリング等を行い、総合的に判断する。認定後も 5 年ごとに評価訪問を実施し、改善点が是正されているかを確認する仕組みが世界共通で設けられている。また、各学校には IB 担当職員が継続的に付き、相談や支援を行う体制がある。
- ・教員の勤務負担については、導入初期は準備や書類作成等で負担が増える可能性があるが、一方で、IB 導入を契機として、組織として業務の見直しや働き方改革を進める好機になり得るとの認識している。

5 参加者【西谷地域と IB の親和性及び公設民営方式の検討について】

- ・西谷地域は少人数規模であり、少人数クラスを前提とする IB 教育と親和性が高く、現状の課題が強みになり得ると考える。一方、教員の立場から見ると、未経験の教育プログラムを教えることへの不安は大きい。
- ・大阪府の公設民営校のように、公設民営方式であれば IB 経験や意欲のある教員を幅広く採用できるのではないかと考えるが、宝塚市ではその方式を検討しているのか。

➔ 応答

- ・現時点では公設民営方式は想定していない。IB 導入の目的は制度導入そのものではなく、IB をきっかけに宝塚市の教育の在り方を現場の教員とともに考えることにある。必要に応じて、他校の見学や研修、将来的な運営形態の選択肢を検討する可能性は否定しないが、現段階では結論を決めず、研究・検討を重ねていく考えである。
- ・市内の公立小中学校・こども園等で働く教員が、自身の経験や問題意識を基に新たな教育の可能性を見いだすことを期待している。

6 参加者【IB 導入前後における子どもの変化と教育効果について】

- ・IB 教育を導入することで、子どもたちが具体的にどのように変化するのか、導入の意義や効果を知りたい。特に小学校・中学校段階における子どもの変化について聞きたい。

➔ 応答

- ・教員は知識を一方向的に教える存在ではなく、子どもの学びに寄り添う「伴走者・ファシリテーター」として関わる。
- ・探究学習は活動そのものが目的ではなく、学びの過程の一部として位置付けられてお

り、子どもの特性に応じて多様な関わり方が認められる。

- ・子どもによって、発表・議論・協働など、それぞれに合った形で成長が見られる。幼児期から中学校段階において、大人の想定を超えた発言や思考が引き出される場面が多い。成長はテスト結果だけでなく、対話、関係性、学びへの姿勢など多面的に現れると認識している。

7 参加者【西谷地域の子ども理解と対話の在り方、乳幼児期教育への懸念について】

- ・IB 教育の内容自体は理解できたが、検討に当たり、市長が西谷地域の学校や子どもたちの現状を実際に見にきたのかに疑問を感じている。
- ・他市では市長が学校を訪問し子どもと対話している例もあり、宝塚市でも事前の対話や現場理解が必要ではなかったかとの思いがある。全国初といった位置付けよりも、子どもを置き去りにしないことを最優先にしてほしい。
- ・乳幼児期は心身の土台形成の時期であり、過度な教育プログラムよりも、遊びや生活を通じた育ちを大切にすべきではないか。

➔ 応答

- ・スケジュールの都合で市内 2 校しか訪問できておらず、西谷小・中学校は現時点で訪問できていない。事前に訪問できなかったことについて申し訳ない。ぜひ早期に学校を訪問し、子どもたちの様子を直接見たい。
- ・IB 導入は「決定」ではなく、これから地域と相談しながら進めるための検討段階であり、今後も皆さんの意見を聞きたい。
- ・子どもが本来持つ力を大切にするという意見には共感する。教育の在り方については専門家や現場の教員、地域とともに考えていく必要がある。教育は上から押し付けるものではなく、子どもにとって最善の方法を対話を通じて見いだしていきたい。

8 参加者【IB 教育導入に伴う支援体制、配慮事項について】

- ・知的障害のある子どもなど、支援が必要な子どもが IB 教育の中でどのように保障されるのか不安がある。
- ・西谷小・中学校に通学していても、IB 教育が合わない場合に、他の公立学校へ通うことが可能かどうかを確認したい。
- ・志を持って IB 教育に取り組む教員が、長期的に負担を感じた場合、教育委員会等が十分に寄り添い、支える体制があるのかを懸念している。
- ・IB 機構による継続的な相談・支援が中心になるのかを確認したい。

➔ 応答

- ・IB 教育は、特定の子どもだけを対象とするものではなく、多様な子どもが学べる教育である。
- ・PYP・MYP では、一定の評価基準はあるものの、子ども一人ひとりに応じて、学校・

教員が評価や学びの形を組み立てることが前提となっている。

- ・「その子にとっての学びとは何か」「何ができるようになることが学びなのか」を重視する。各学校には候補校の段階ではコンサルタントが配置され、学校からの相談には随時対応可能。

必要に応じて、IB 機構として直接相談を受ける体制もある。

- ・基本的な特別支援の枠組みは、現行と大きく変わらないとの認識。IB 導入により、教育の形が変わる中で、通常学級で学べる子どもが増える可能性もあれば、逆に合わないケースが出る可能性もある。文部科学省の学習指導要領の枠組みを逸脱するものではなく、日本の教育制度の中で行う取組であり、極めて特別な教育を新たに行うという位置づけではない。
- ・教員の習熟度には個人差があることを前提としている。教育委員会を中心に、IB 機構の支援を受けながら進める。必要に応じて調整や見直しを行い、教員へのサポートは継続的に行う考えである。

9 参加者【IB 教育導入時における学校選択の可否について】

- ・西谷小・中学校で IB 教育を導入した場合、IB 教育が合わないと感じた児童生徒が、他の公立学校へ通うことができるのかを確認したい。
- ・IB 教育が事実上の「選別」や進路制限につながらないかを懸念している。

➔ 応答

- ・IB 教育は、文部科学省の学習指導要領の枠内で行うものであり、従来の公立学校教育から大きく逸脱するものではない。また、校長の交代等による教育方針の変化と同程度の位置づけであり、「合わないから通えない」といったほどの大きな制度変更ではない。仮に不安や懸念がある場合には、個別に相談しながら対応する姿勢を示した
- ・就学に関する不安や希望については、保護者の意向を踏まえ、個別に相談に応じる。他校への就学を含め、相談自体は可能であり、柔軟に対応していく。

10 参加者【西谷地域における既存の教育実践と IB 教育導入の位置づけ及び評価の考え方について】

- ・西谷小・中学校では、既に非認知能力やメタ認知能力を重視した教育実践が高い水準で行われていると認識している。IB 教育を導入することで、これまでの実践が否定されたように受け取られないかを懸念している。
- ・一方で、IB 認定により、管理職の交代等があっても教育実践が継続できる。属人的でなく、システムティックに教育を維持できる可能性がある点は評価している。併せて、評価方法がどのようになるのか IB を中学校まで導入した場合、高校・大学進学との接続がどのようになるのかについて見通しが見えにくいのではないかと懸念している。
- ・IB が本来持っていた「大学進学と結びついた教育」の側面を欠いた場合でも、制度と

して成立するのか。

➔ 応答

- ・西谷地域で行われてきた教育実践は高く評価しており、それを否定する意図は一切ない。IB 教育は、西谷で既に行われている教育と親和性が高く、それを言語化、枠組み化、継続可能な形に整理するための「手段」として捉えている。属人的な取組ではなく、一定の枠組みの中で継続できる仕組みをつくるのが目的である。
- ・評価については、IB の評価、文部科学省の学習指導要領に基づく従来の内申評価の双方を併存させるケースが多い。
- ・進路については、通常どおり高校受験を経て進学するルート、IB の高校課程へ進むルートの両方があり、飛び級を前提とするものではない。現実的には、多くの生徒は従来どおり高校・大学へ進学するが、IB での学びが大学出願時に評価されるケースが増えている。
- ・IB には評価に関する共通の基準が存在する。その評価基準を、各学校の教材、授業の流れに合わせて、学校ごとに調整・活用することが可能である。
- ・日本の公立中学校では、IB 独自の成績表を発行するのではなく、IB の評価基準を用いながら、学校内評価として成績を出す運用が一般的である。
- ・MYP を修了した生徒については、高校卒業後に MYP での学びを評価対象として大学出願が可能で、日本国内でも出始めている。大学側も、どのような学びを経た学生を受け入れたいかという観点から、IB や MYP の教育実践を評価する動きが広がっている。

11 参加者【学校づくりにおける地域住民の役割について】

- ・IB 教育に限らず、西谷地区の住民として学校に対して何を期待されているのか、何ができるのかを知りたい。
- ・都市部では子どもの行動に対する過度な苦情が多いが、そうではなく、西谷の小・中学校が魅力ある学校となり、通いたい地域・学校になってほしいと考えている。そのために、地域の大人が果たせる役割や関わり方があれば教えてほしい。

➔ 応答

- ・IB を含む教育プログラムでは、社会と教育現場のつながりを重視している。
- ・地域の産物を題材に、観察・流通・生産者との対話・栽培体験などを組み合わせた地域連携型の学びが実践されている。学校と地域を切り離すのではなく、地域の大人が教育に参画することが重要であり、IB 教育にはその機会が多く用意されている。

12 参加者【IB 導入に対する教職員の不安と継続性について】

- ・市長に西谷の小学校・中学校・こども園を訪問し、子どもや教職員の現状を直接見てほしい。IB への期待が高まる一方、教職員には不安が大きいのではないかと感じている。

- ・少子化や複式学級の中で積み重ねてきた地域一体の教育の取組を活かし、IB と無理なく接続してほしい。
- ・子どもが学びを楽しめる教育として継続していくため、市長交代後も含めた長期的な見通しを確認したい。

➡ 応答

- ・学校訪問の要望を受け止めつつ、IB は国際標準で柔軟性の高い教育であり、過度に構える必要はない。
- ・西谷でこれまで行われてきた工夫ある教育と IB は親和性があり、既存の取組を整理・発展させる枠組みと考えている。
- ・IB 導入は研究・検討の過程を重視し、合わなければ無理に進めるものではない。
- ・導入の可否は市長個人ではなく、教職員や地域を含めた合意形成により決定され、行政施策として継続されるものと考えている。
- ・複式学級であっても PYP・MYP は十分対応可能であり、小規模校を前提に排除されるものではない。
- ・IB カリキュラムは教員の主体的判断と専門性を重視した柔軟な設計になっている。

13 参加者【通学手段と導入時期について】

- ・池田市にも IB 校があり、先日、市長はそちらのほうが近いと言われた。西谷校への通学手段（交通事情・通学のしやすさ）をどう考えているのかを知りたい。
- ・IB 導入までのロードマップや時期の目安について、市長の考えを聞きたい。

➡ 応答

- ・池田の IB 校は国立校であり、受験が必要な学校である一方、西谷は市民であれば通える公立校であり性格が異なるもの。
- ・通学については、現在プロポーザルにより検討中であり、スクールバス機能の確保は条件として盛り込んでいる。具体的な内容は決まり次第、地域に共有する。
- ・IB 導入の時期は期限を区切って進めるものではなく、研究・議論を重ねる中で判断すべきと考えている。
- ・認定取得そのものを目的とせず、西谷で積み重ねてきた教育の良さを言語化・発展させるための「きっかけ」として IB を捉えている。
- ・教職員・地域・教育委員会の議論を尊重し、合意形成を前提に市として応援していく立場である。

14 参加者【学力水準と IB 導入の実効性について】

- ・市長が西谷中学校の現在の学力水準を把握しているかを確認したい。
- ・IB は主体的なアウトプットを重視する教育だが、現状の基礎学力やインプットの水準で実現可能なのかに疑問がある。探究学習を行うための基礎的知識・学力が不足してい

る生徒が多い中で、IB をどう機能させるのか。

- ・ IB 自体は評価しているが、現状を改善しながら導入・運営する具体的な考え方を聞きたい。

➡ 応答

- ・ 西谷中学校の学力については一定の話は聞いているが、数値までは把握していない。探究は一定の学力を前提とするものではなく、子ども一人ひとりの発達段階や能力に応じた探究の形がある。「この学力がなければ探究できない」という画一的な枠組みには違和感がある。
- ・ IB はアウトプットを求める教育ではなく、探究の過程の中で、その子なりのアウトプットが生まれるもの。
- ・ 基礎学力は当然重要だが、今の教え方が本当に子ども一人ひとりに合っているのかを考え直す余地がある。
- ・ IB は現行の学習指導要領と大きく矛盾するものではなく、教育を見直す一つの「きっかけ」として捉えている。
- ・ 西谷で積み重ねてきた教育の良さを言語化し、より良くするための議論を進めたい
- ・ 基礎学力は必要であり、IB を導入しても教科書学習や練習問題を否定するものではない。重要なのは、基礎学力を「身につけて終わり」にせず、理解した内容を概念として捉え、応用できる力につなげること。
- ・ IB では、基礎学力の習得と探究的な学びを対立させず、授業の中で両立させる仕組みを作る。一定の段階を踏まなければ次に進めないという単純なステップ型の考え方ではない。